

古墳時代後期における円筒埴輪について

河内一浩（羽曳野市教育委員会）

1. 山口コレクションの出会い

山口善一氏 戦後から昭和30年代に採集
縄文時代から奈良時代 石器、土器、瓦、埴輪 96箱
平成16年紀伊風土記の丘資料館に寄贈
大谷古墳の円筒形埴輪

2. 鳴神団地出土の埴輪

昭和32年12月付けの1枚の写真
昭和33年3月付けの円筒形埴輪の写真
動物形埴輪の写真と鳴神埴輪窯跡（製作遺跡）

3. 出土埴輪の観察

底部高が突帯間隔より高い
底径20～22cm
外面はタテハケ調整
突帯は台形

4. 紀伊の古墳時代後期の円筒形埴輪

畿内型と紀伊型（1988「古墳時代後期における紀伊の埴輪生産」『求真能道』）
顔想の異なる埴輪→複数の製作集団による
伝統的と先進的
在地産

5. まとめにかえて

埴輪の地域色→地域間交流
部民制とミヤケ
和歌山県古墳時代研究会への期待

【添付資料】

「和歌山市・鳴神埴輪窯跡の再検討－紀伊の後期円筒埴輪について－」
『堀田啓一先生喜寿記念獻呈論文集』（2011）

和歌山市・鳴神埴輪窯の再検討

- 紀伊の後期円筒埴輪について -

河内一浩

I. 山口コレクションの埴輪

和歌山県立紀伊風土記の丘資料館に伝花山から出土として馬形埴輪の頭部が展示公開されている。この資料は和歌山市在野研究者の山口善一氏が採集された資料(以下、山口コレクションと称す)で、円筒形埴輪と共に紀伊風土記の丘資料館に収蔵されている。

同コレクションには、和歌山市大谷の大谷古墳から採集された円筒形埴輪が含まれている。『大谷古墳』の図版 55 に報告されている H11 や第 47 図山口 1、山口 2、山口 3、山口 5 が該当する(文献 17)。そのため、「大谷古墳」あるいは「大谷」とメモ書きされた円筒形埴輪片が多く存在する。ところが、形態や手法が明らかに『大谷古墳』の報告書に記載された円筒形埴輪と異なる一群が存在する。それらの円筒形埴輪の数点は昭和 33 年の日付がある新聞紙に包まれ、「南から 4 号」のメモ書きがされている。山口氏が大谷古墳で埴輪を採集されたのは昭和 24 年 7 月であり、新聞の日付に大きな隔たりが生じる。しかも、大谷古墳から採集された円筒形埴輪や形象埴輪にしては余りにも数量が多すぎる。

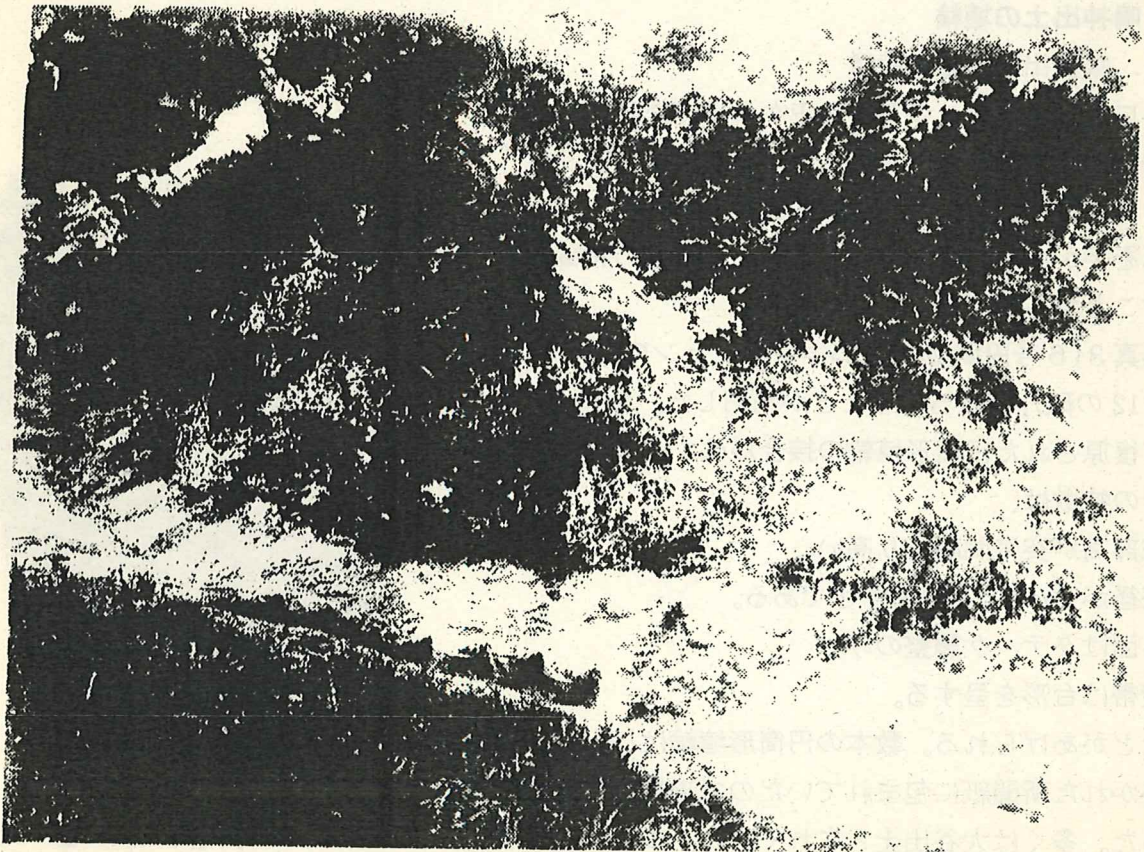


写真 1 大谷古墳埴輪出土状況 (山口善一氏撮影)

メモ書きにある「南から…号」という記載は明らかに円筒列の取り上げの番号と推測できる。新聞にある番号の最大は13号で、大谷古墳で採集されたのは記録上7本(写真1)で円筒形埴輪の採取数量が多い。以上のことから大谷古墳以外の古墳であることが推測できた。では、一体どこの古墳から出土した埴輪であろうか。その出土地を確定する手がかりは山口善一氏が撮影した写真にあった。

円筒列を撮った写真2の裏に、「ハニワ円筒南ヨリ一・二号 土取場より出土所有者〇氏(個人名) 南鳴神坂戸谷 251 252 番地 昭和32年12月」と書かれていたのである。

さらに、同じ地番が書かれた写真3には「昭和33年3月埴輪円筒南より、6号」のメモされた円筒形埴輪があり、出土埴輪の形態が判った。その他、写真には犬形埴輪や馬形埴輪も含まれている。

そこで、山口コレクションから写真にある鳴神の円筒形埴輪を組上に置き、和歌山県内の円筒形埴輪と比較検討し、埴輪の製作時期や出土地の性格を明らかにすることを目的とする。

馬形埴輪の出土地は(鳴神)埴輪窯とされていたが、埴輪列の存在から墳丘が削平された古墳の存在を証明していきたい。

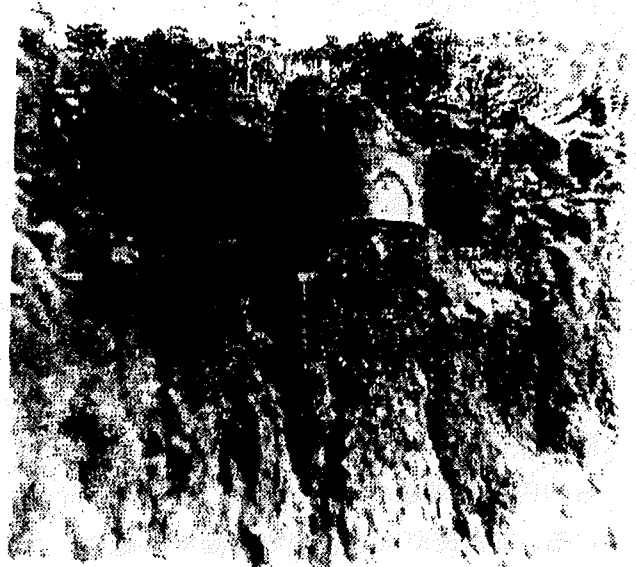


写真2 山口善一氏撮影の円筒列(昭和32年)

II. 鳴神出土の埴輪

a. 鳴神出土埴輪の特徴

山口コレクションの資料の中から鳴神採集の円筒形埴輪を抽出することにした。まず山口氏が撮影した「南より6号」とした円筒形埴輪(以下6号円筒とする)の写真を手がかりに探し出し、鳴神出土円筒の特徴を見出すことから始めた。

写真3(6号円筒)から山口コレクションの12-10と12-12の破片が該当することが判明した。山口氏によって復原された円筒形埴輪の接合がはずれていた。

その特徴は、

- ①底部高が突帯間隔より高い。
- ②底径が20~22cmの大きさである。
- ③外面はタテハケ調整のみ。
- ④突帯は台形を呈する。

などがあげられる。数本の円筒形埴輪は「南から…号」と書かれた新聞紙に包まれていたので鳴神出土として取扱った。多くは大谷出土とされていた。また、花山出土とされている埴輪にもあった。



写真3 6号円筒(山口善一氏撮影)

出土地不明の円筒形埴輪の中にも上記の特徴に合致する破片を確認したが、大量の破片のため接合は時間的に無理であった。現在まで新聞紙のメモ書きから埴輪は13本まで確認できる。13本のうち、該当する破片が確認できたのは表1に明示した6例であった。

破片の中には接合した痕跡が確認できる円筒形埴輪もあり、時間をかけて接合作業を進めれば、さらに復原された円筒形埴輪の数が増加するであろう。

b. 出土埴輪の観察

図化できた資料は図1に提示した。以下実測図をもとに朝顔形埴輪と円筒形埴輪の属性分析を進めることにしたい。

1は朝顔形埴輪である。頸部から下の円筒部は欠損するものの、一次口縁、二次口縁が2分の1遺存する。口縁部径が42.8cmで、口縁部高の法量は二次口縁部高15.0cm、一次口縁部高7.0cmである。頸部に突帯を貼り付け、頸部径が21.8cmを測る。調整方法は、口縁部の外面がタテハケで内面はヨコ方向のハケメを施す。肩部の外面調整はタテハケ、内面はナデ調整であった。

2は円筒形埴輪の口縁部の破片で、断面のみ図化した。口縁部高が9cmを計測する。外反気味の口縁部の端部は外方と内側が肥厚する。外面タテハケ、内面はヨコハケを施す。

3は、円筒形埴輪の口縁部を含む最上段から下に2段分が遺存する。2条の突帯はやや崩れたM字状を呈する。口縁部径40cm、口縁部高9.8cm、突帯間隔11cmを測る。調整は、外面タテハケ、内面ヨコハケを施す。

4は円筒形埴輪の口縁部の拓本である。口縁部に見られるヘラ記号は、上向きの半円を先に描き、半円の下半に横方向の直線を半円より長く引く。全体の形は左へ90°傾けたアルファベット大文字の「D」に近い。

5は3号円筒の底部である。底部径は22cmで、突帯が遺存しないため底部高は不明である。残存高は18cmを測る。底部の断面に接合した痕跡があるが破片を見出せなかった。外面調整はタテハケ、内面調整はタテ方向のナデが認められる。

6は6号円筒で底部を含む3段分で、2条の突帯が遺存する。写真2の6号円筒に該当する。法量は底部径が20.8cm、底部高が20.7cm、突帯間隔が11cmである。2段目に円形のスカシ孔が認められた。残存状況から3段目にはスカシ孔が穿かれなかったと思われる。

7は樹立位置が不明であるが、1条の突帯がめぐる円筒形埴輪の底部である。底部径が20cm、底部高が24cmを測る。2段目に円形のスカシ孔が観察される。調整は外面がタテハケ、内面はタテ方向のナデを施している。突帯は断面形が扁平であった。

8は10号円筒で、突帯1条を含む底部である。底部径が22cmを測るが、底面は尖った断面を呈し、斜めになっている。そのため底部高は17~20cmを測る。外面調整はナデ、内面調整もナデであった。スカシ孔が2段目に見られる。突帯は7と同様に扁平な断面を呈する。

9は4号円筒で1条の突帯を含む底部である。底部径が21.5cmで底部高が20.7cmを測る。2段目に円形スカシ孔が観察される。突帯は、突帯高の高い断面形態が方形に近い。突帯の高さは1cmであった。外面調整はタテハケで、内面はユビナデの後ハケメを施す、

10は7号円筒で1条の突帯を含む底部である。底部径が21.8cm、底部高が20.7cmである。断面形態が台形に近い突帯で、突帯高0.6cmを測る。2段目に円形スカシ孔が観察できた。外面調整はナデ、内面調整もナデを施す。

11は1号円筒と考えられる円筒形埴輪で、2条突帯を含む3段分が遺存する。底部径が22.2cm、底部高が21cm、突帯間隔が cmを測る。底部の外面の一部分が剥離している。突帯の断面形態は崩れたM字状を呈する。2段目に円形スカシ孔が認められるが、正円ではなく横方向に長い楕円形である。外面調整はナデである。内面は底部付近にハケメが施される以外はタテ方向のナデ調整であった。

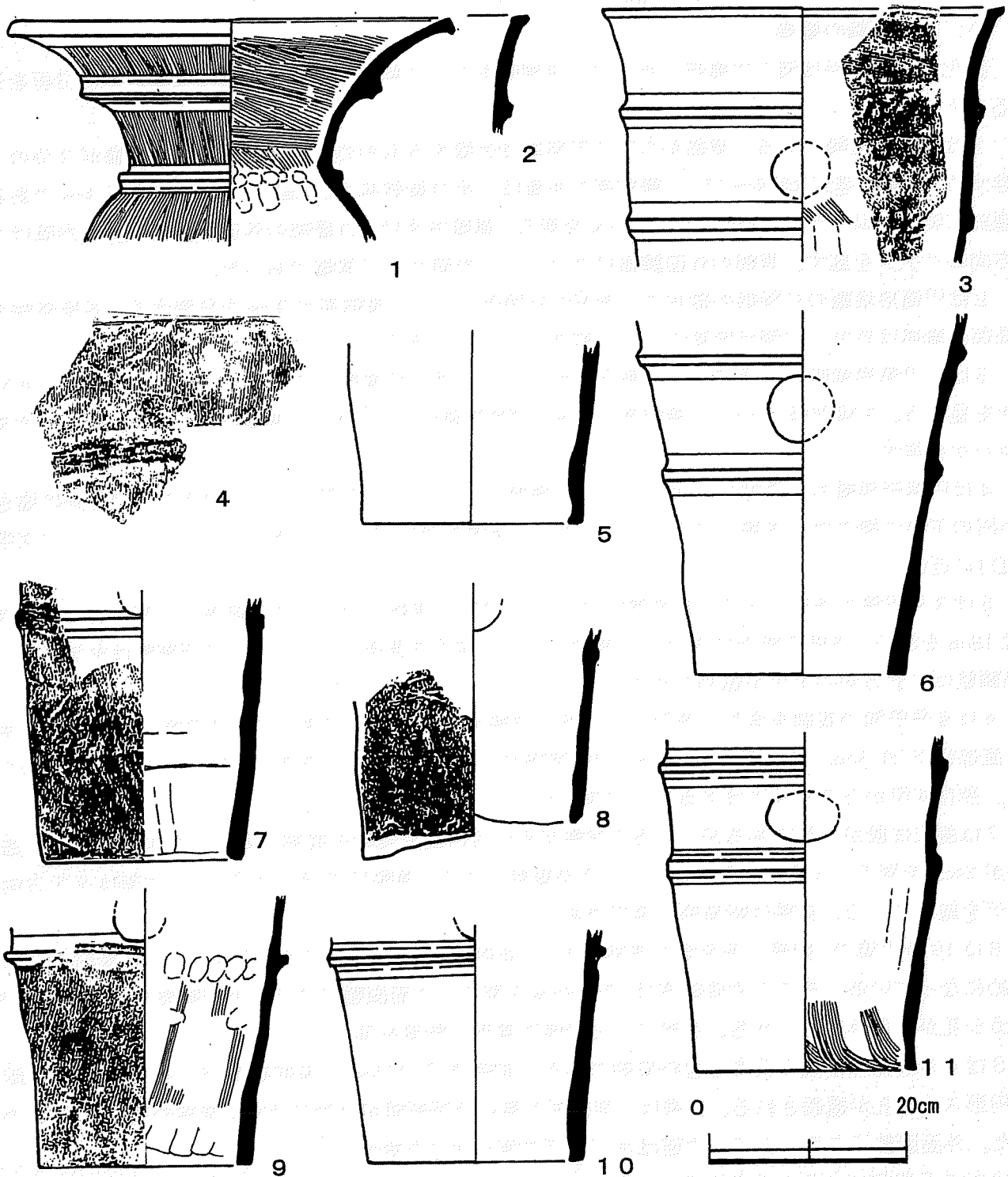


図1 山口コレクション円筒形埴輪実測図（河内実測）

鳴神団地円筒列の埴輪

埴輪番号	コレクションNo.	残存状態	底径	底部高	突帯間隔	突帯形態	備考
南より1号	12-5、12-9、12-13	I	22.2	20.9	9.8	B	
南より2号							未確認
南より3号	21-3	III	22	-	-		
南より4号	21-1	II	21.5	21.3		A	
南より5号							未確認
南より6号	12-10、12-12	I	20.8	20.5	11.5	B	
南より7号	21-8-1	II	21.8	20.5	-	B	
南より8号							未確認
南より9号							未確認
南より10号	5-2	II	22	20.5	-	C	
南より11号							未確認
南より12号							未確認
南より13号							未確認

表1 円筒列の埴輪一覧

c. 円筒形埴輪の復原

円筒形埴輪の全形を復原するにあたり、2条突帯まで遺存する図1-6の6号円筒と図1-11の1号円筒の底部、胴部をモデルとした。口縁部は図1-3の口縁部をもとに復原を試みた。

スカシ孔は底部の上の段と口縁部の下の段に確認できる。底部から2段目にはスカシ孔が確認できない。

内面調整を観察する口縁部から下の段までタテハケが施されることから底部から2段目はスカシが無く、その上の段にスカシ孔が組み違えに穿かれる。

以上の点から右図に示した4条突帯5段の円筒形埴輪が復原できる。

埴輪の規格は、法量を計測した資料10点から底径は21cm~22cm、底部高は21.5cm~22cm、突帯間隔は9cm~10cm、口縁部高は9cm~10cm、口径は40cm~42cmである。

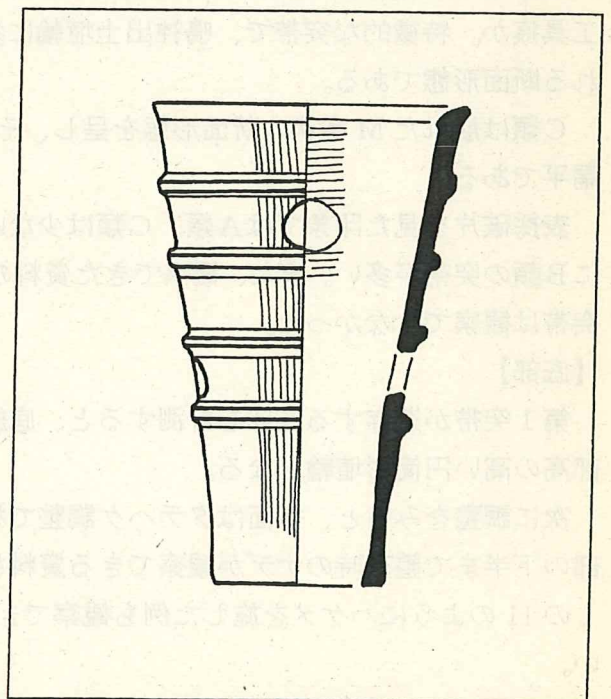


図2 円筒形埴輪復原図

【口縁部の特徴】

口縁端部は右図に示したように外上方へ肥厚し、内面も肥厚する形態を呈する。大きく区分すれば肥厚が内外側の口縁端部と外側のみ肥厚する口縁端部になる。詳細に観察すると、口縁端部のナデ調整の強弱で右図の左のように内外面に肥厚する端面と、同図の右のように内面のみ肥厚する端面がある。これは工人差として捉え、ここでは細分しなかった。

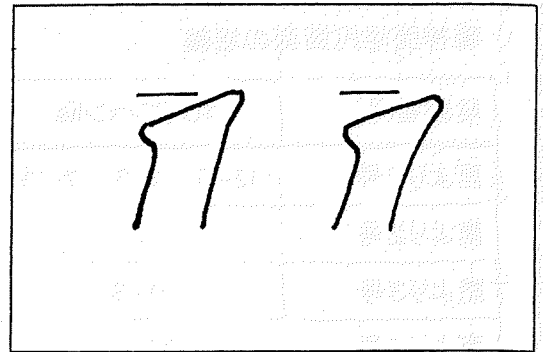


図3 口縁部断面図

内外面を肥厚する口縁端部の断面形はかつて「紀伊型」とした古墳時代後期の円筒埴輪の形態に類似する(文献3)。

断面形態だけを見ると「紀伊型」の特徴を示すが、鳴神出土の円筒埴輪は外面調整にヨコハケを施すのでは無く、タテハケのみで調整を終了する調整方法は「紀伊型」の円筒形埴輪と言えない。外面調整からはタテハケ調整のみを施す「畿内型」となる。ただし畿内型の口縁は、直立気味でその断面が凹む口縁端を有する。したがって、鳴神出土埴輪の口縁部は、断面形態から畿内型の特徴は見出せなかった。

【突帯特徴】

突帯形態は大きく3つに分類できる。図4に示した示した断面の左からA類、B類、C類とする。なお、表1の突帯形態は本分類に準じる。

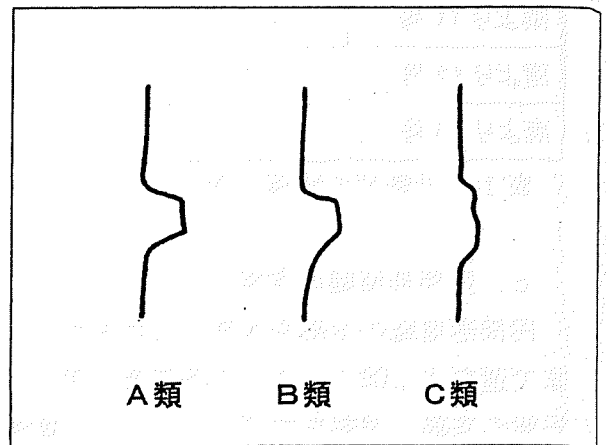


図4 突帯断面図

A類は台形を呈するが、方形に近い形状もある。突出度が高い突帯である。

B類はM字条突帯の突帯上辺が明確な段を有する。工具痕か。特徴的な突帯で、鳴神出土埴輪に多く見られる断面形態である。

C類は崩れたM字状の断面形態を呈し、その突出度扁平である。

表採破片を見た印象ではA類、C類は少ない。圧倒的にB類の突帯が多い。また、観察できた資料の中には「紀伊型」の特徴である突帯中央が凹むM字状突帯は観察できなかった。

【底部】

第1突帯が遺存する底部を計測すると、底部高が21~22cmを測る。突帯間隔が9~10cmなので底部高の高い円筒形埴輪となる。

次に調整をみると、外面はタテハケ調整である。中にはハケメ調整が底面まで丁寧に施されずに底部の下半まで整形時のナデが観察できる資料もある。内面は総じてタテ方向のナデ調整であるが、図1の11のようにハケメを施した例も観察できる。底部調整を施した底部は今のところ確認できていない。

底部高が高い特徴は、和歌山県下の後期円筒形埴輪に多く見られる。紀伊型とした円筒形埴輪は底部高が高い。また、畿内型とした井辺八幡山古墳の円筒形埴輪の底部高も高い(文献16)。

Ⅲ. 紀伊の円筒形埴輪編年再考

a. 円筒形埴輪系列編年

紀伊地域の円筒形埴輪は河内や和泉と比較すると地域色豊かな個性的なものと理解している。したがって、ハケメの手法を細かく分類しても編年の属性には効果的ではなかった。そのため形態を中心とした手法を見ていくと紀伊から出土した円筒形埴輪を8系統に分類し、それらをA類からH類と呼称した(文献5)。

分類した8系統を形態・手法の変遷から大きく3段階に分けた。

紀伊における円筒形埴輪出現期を紀伊Ⅰ期、4世紀後半から5世紀初頭とした。

須恵器技法の円筒形埴輪出現期を紀伊Ⅱ期、5世紀前半から5世紀後半とした。

タテハケで調整を終了する円筒形埴輪を紀伊Ⅲ期とした。

この3期区分編年は資料の少ない和歌山にあっては有効と考えたのである。

ところが、埴輪研究会による共通編年作成にあたりⅤ期区分を2002年に試みた(文献7)。

翌年、和歌山県の埴輪編年は藤藪氏によって発表されている(文献19)。

同年に筆者は系列図を改変し、編年案を改めて提示したが、時系列を明確に示すことができなかった(文献8)。特に古墳時代後期において畿内型と紀伊型に二分することによって和歌山の特殊性を明らかにした。

ところが、平成15年から平成17年に発掘調査された岩橋千塚古墳群の大日山35号墳において、H類とした「紀伊型」とG類とした「畿内型」の円筒形埴輪が供伴していることが判明した。筆者が紀伊型埴輪を設定した際には「紀伊型」と「畿内型」は一つの古墳から出土しないとしたが、大日山35号墳では供伴していたのである。

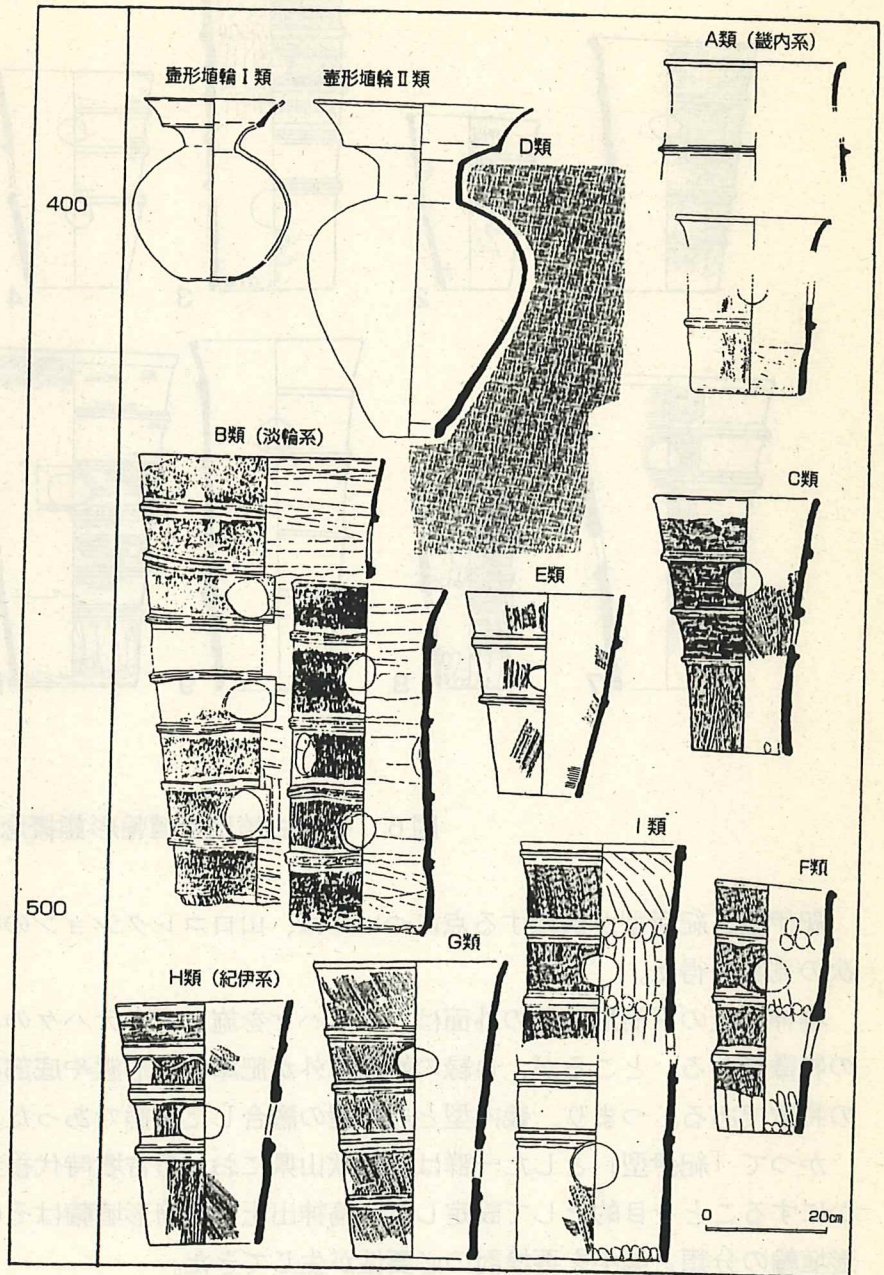


図5 和歌山県円筒形埴輪編年図

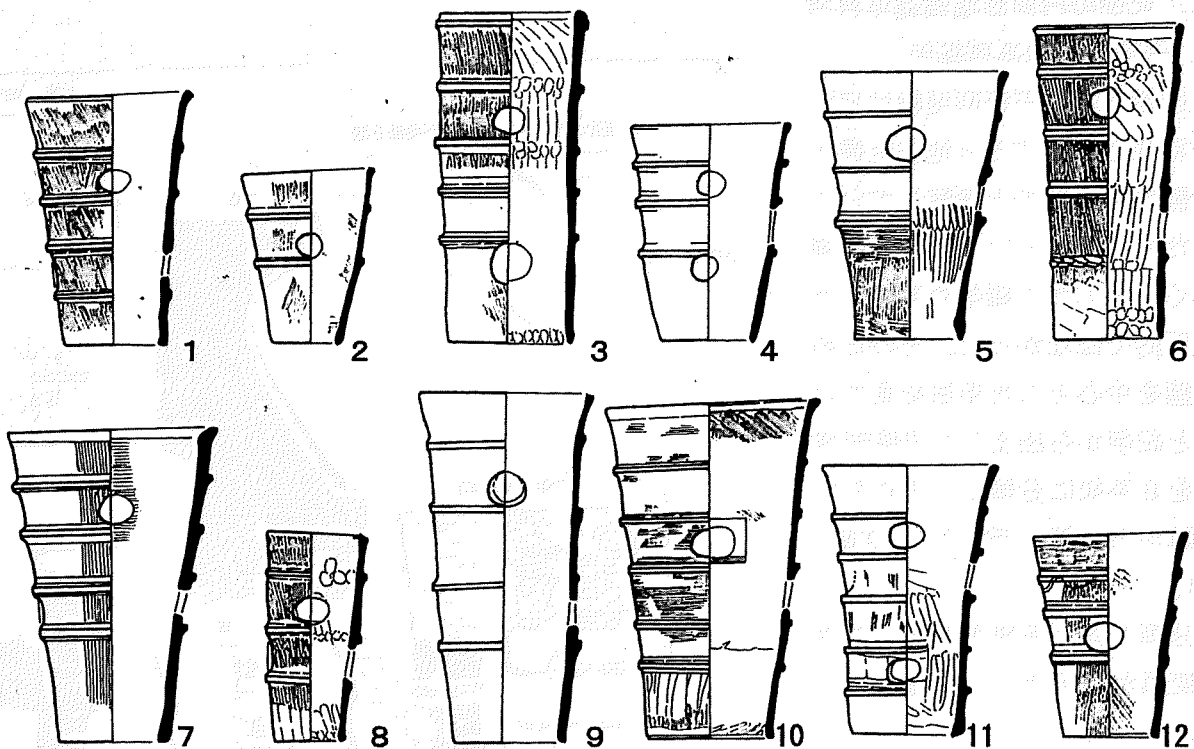


図6 後期古墳出土埴輪形態概念図

紀伊型と紀伊型が供伴する点については、山口コレクションの鳴神出土埴輪を整理していく過程で次の見解を得た。

鳴神出土の円筒形埴輪の外表面は、ヨコハケを施さずタテハケのみで終了する調整方法で「畿内型」の特徴である。ところが、口縁の端面内外が肥厚する形態や底部高が高い底部を有する規格は紀伊型の特徴である。つまり、畿内型と紀伊型の融合した形態であった。

かつて「紀伊型」とした一群は、和歌山県における古墳時代後期の円筒形埴輪の形態的特長を明らかにすることを目的として設定した。鳴神出土の円筒形埴輪はその分類とは違った形態であり、円筒形埴輪の分類と編年を再検討の必要性が生じてきた。

そこで、和歌山県内の古墳時代後期の円筒形埴輪を集成し、形態や技法から12類に分別してみた。その集成図が図6である。以下、分類別の特徴を記述する。

1は4条突帯5段で、各段は等間隔である。2段目、4段目に組違いでスカシ孔。タテハケ調整を施され、底部調整も確認できる。大谷古墳を指標とし5世紀末葉と考えられる。

2は2条突帯3段で、底部高が高く、口縁部高が短い。スカシ孔は2段のみ。タテハケ、ヨコハケによる調整。底部調整もあり。晒山7号墳を指標とし、5世紀末葉と考えられる。

3は5条突帯6段。底部高が高く、口縁部は極めて狭い。スカシ孔は1段目（底部）と3段目、4段目に組違いに穿つ。外面はタテハケ調整。天神山古墳を指標とし、6世紀前半と考えられる。類似する資料が市尾墓山古墳にあり、辻川氏これを「紀伊・大和南部」と仮称されている（文献15）。

4は3条突帯4段で底部高が高い。スカシ孔は1段目（底部）、2段目、3段目に組違いに穿つ。外

面はタテハケ調整。背見山古墳を指標とし、6世紀前半と考えられる。

5の3条突帯4段で底部高が高い。スカシ孔は2段目、3段目に組違いに穿つ。外面はタテハケ調整後にヨコハケを施す。背見山古墳を指標とし、6世紀前半と考えられる。

6は4条突帯5段で底部高の高い資料もある。スカシ孔は2段目と4段目に組違い。1条突帯は断続ナデ。井辺前山32号墳を指標とし、6世紀前半と考えられる。

7は4条突帯5段で底部高の高い底部をもつ。2段目と4段目に組違いにスカシ孔がある。鳴神出土の埴輪である。

8は3条突帯4段の小型埴輪である。スカシ孔は2段と3段。タテハケ調整。底部調整が認められる。雨が谷3号墳を指標とし、6世紀前半と考えられる。

9は4条突帯5段、底部高が高い。スカシ孔は2段と4段。タテハケ調整。底部調整が認められる。井辺八幡山古墳を指標とし、6世紀中葉と考えられる。

10は花山の北で出土した5条突帯6段の円筒形埴輪である(文献1)。底部高が高い形態を呈し、調整はタテハケ後、ヨコハケを施す。大日山35号墳でも出土している。6世紀中葉と考えられる。

11は船戸箱山古墳から出土した円筒形埴輪で、全体を窺える資料はない。スカシ孔の位置(2段、4段、5段に穿っている)から5条突帯6段を復原した。6世紀中葉と考えられる。

12は3条突帯4段、底部高が高い。スカシ孔は2段目のみ。調整はタテハケのちヨコハケを施す。箱谷3号墳を指標とし、6世紀中葉と考えられる。

以下、12類に分けた埴輪をアルファベットの小文字で表記する。

かつて筆者が唱えた紀伊型は1類のみであった。その後、j類も含めた。対して、畿内型としたのはa類、h類である。

筆者が意図する紀伊型以外にc類、d類、k類も紀伊型に含まれだしてきた。図6からは「畿内型地」と「畿内型」を二分できる様相でないことがわかる。ここであえて紀伊型埴輪の提唱した者として紀伊型という円筒形埴輪の型式を撤回したい。また、「環畿内南部型」(文献8)の提唱も保留したい。その上で、改めて次のように分類したい。

a類とh類の円筒形埴輪を畿内型とする。それ以外は、「紀伊地域で見られる埴輪群」となる。今回、あえて〇〇型という呼称は考えていない。便宜上〇類とする。

したがって、大日山35号墳の畿内型円筒形埴輪としたi類は今回の分類では畿内型にはならず、j類ともに「紀伊地域で見られる埴輪群」といくことになる。

「紀伊地域で見られる埴輪群」が見られる古墳のいくつかに複数の埴輪群が確認できる。今後は分類した埴輪群の組み合わせで考える必要がある。

b. 円筒形埴輪の年代

鳴神から山口善一氏が採集した円筒形埴輪の年代は、外面に施されたタテハケの調整から筆者の編年の紀伊Ⅲ期に該当する。古墳時代後期(5世紀末葉から6世紀中葉)となる。

鳴神の円筒形埴輪を復原すると4条突帯5段の形態を呈示する。図6-7のg類になる。形態特徴からa類、h類とした畿内型に該当しない。

g類の口縁部断面が斜めに立ち上がり、端面が内外に肥厚するものであり、この形状はd類、e類、j類、l類にも共通する。出土する須恵器から6世紀前半から6世紀中葉の年代が考えられるので、g類も同時期と考えてよからう。

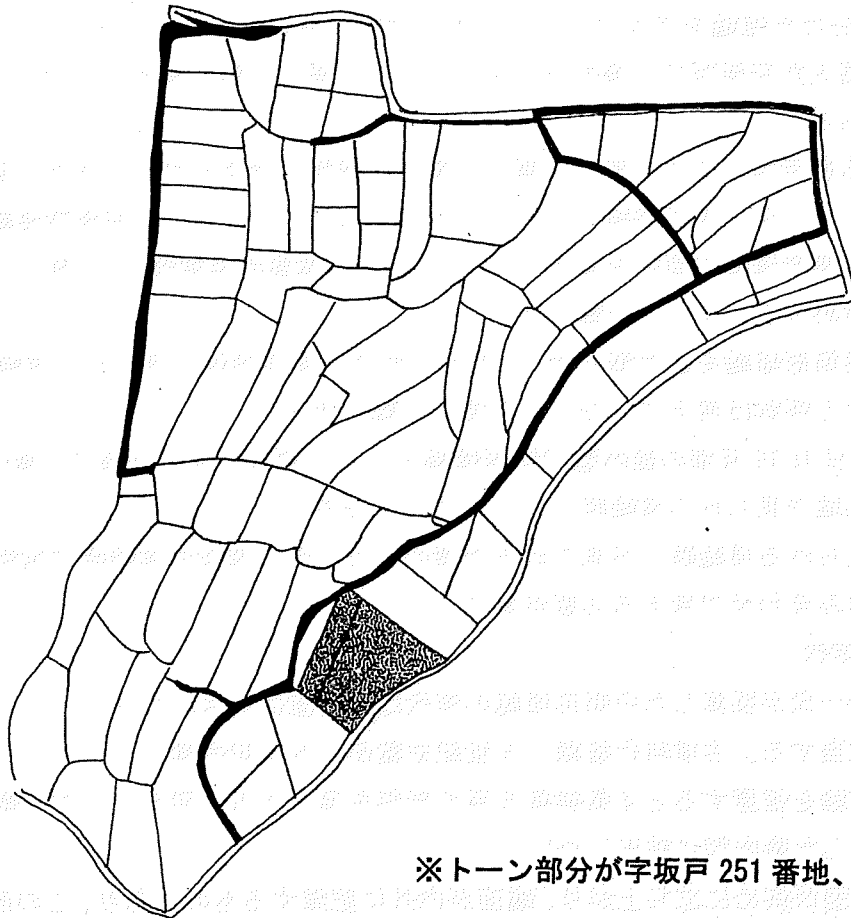
IV. 埴輪の出土地について

a. 鳴神の埴輪出土地

写真にある南鳴神字坂戸坂谷 251 番地・252 番地の畑は現在どこか。

平成 23 年 9 月和歌山地方法務局へ行き、地番を調べることにした。南鳴神字坂戸谷は実際に登記簿で調べると鳴神字坂戸であることが判明した。字坂戸は現在の鳴神団地であるが登記簿では 251 番地、252 番地という番地は使用されていなかった。これは、明治 24 年の土地台帳によると坂戸 251 番地は昭和 35 年 1 月 21 日に和歌山市に所有権が移るとともに 248 番地に合筆閉鎖された為である。山口氏が埴輪を採集した昭和 33 年代当時の土地所有者は、写真裏に記述のあった O 氏であることから裏付けられた。公図で確認した出土地が団地として開発されたいたため 251 番地が確認できなかったが幸いにして明治 24 年 2 月の公図が保管されており、そこに 251 番地の見つけることができた(下図のトーン部分)。

だが、昭和 35 年以前の地図、つまり鳴神団地が造成される前の地形図が手に入らず、明治 24 年の公図の位置を現在の地図に対比することができなかった。そこで航空写真から検討を加えることにした。ところが、昭和 36 年に撮影された写真を見るとすでに鳴神団地の区画が存在していた。それ以前になると、米軍が撮影した航空写真を見るしかなかった。画像は余り良くないが明治 24 年の公図と合致し、埴輪が出土した坂戸 251・252 番地を最新の和歌山市都市計画図に示すことができた。



※トーン部分が字坂戸 251 番地、252 番地

図7 明治 24 年の公図 (トレース)



図8 鳴神団地内埴輪出土地点（黒丸印の部分）

上の地図の黒丸が山口氏によって昭和32年12月に円筒列が発見された地点である。現在は鳴神団地になっている。

団地造成工事中には山口氏以外の研究者が現場を訪れ、遺物を採集されている。また、昭和33年12月23日に当時和歌山県文化財専門委員長であった田中啓忠氏が調査をされていることが調査翌日の産経新聞に掲載された記事から知ることができる。新聞記事からは埴輪の出土の性格については結論がでなかったようだ。

また、昭和37年に巽三郎氏によって『熊野路考古』に出土地の記述が載せられている（文献14）。その記録には、住宅団地建設以前の鳴神の地はなだらかな台地であり、この地から古墳が発見された記録はない。整地工事中に訪れた際には石室も認められず、石材も見当たらないことからすでに破壊されたとも考えられないとしている。そして遺跡の性格は今後の検討の必要を訴えられている。

その後、結論がでないままで一部では埴輪窯があったと推定されるようになった。団地の造成工事で大量の埴輪と黒色土の存在は、古墳というよりも生産地の印象が専行した結果であろう。しかしながら鳴神団地の造成時で窯は発見されていないようだ。また、窯の存在を示すような窯壁も報告されていない。採集された埴輪片には観察した資料には生焼けや焼歪みも認められなかった。

b. 鳴神埴輪窯の再検討

かつて『和歌山県埋蔵文化財情報』18（文献2）において和歌山県下の遺跡から出土した8遺跡を取り上げ、「鳴神団地埴輪出土地」を

①埴輪窯として疑問

②鳴神周辺に未知の古墳の予察

を考えた。

生産遺跡の可能性をあげる根拠である幅10mの黒色土は土質が問題となる。幸いにして和歌山市教育委員会が所蔵している埴輪片は未洗浄であった。破片を観察したところ、埴輪に付着しているのは炭や焼土ではなく、乾燥していたが粘質系の土であった。その感触は古墳の周濠から出土した埴輪片に近い。

したがって、造成工事現場で採集された埴輪は、埴輪窯で生産された廃棄品ではなく古墳に樹立されたものと私は理解する。その量の多さから古墳は小規模ではなく大型古墳の存在を考えたい。

古墳の詳細は改めて報告するが、現時点では地籍図や航空写真から推定される墳形は東向きの前方後円墳で、その規模50mを超える。また周辺の不自然な形の畦畔は濠であった可能性が高く航空写真から幅10数mの痕跡が読み取れる。この推測が正しいければ埴輪を大量に含んでいる黒色土の層は周濠の堆積層と理解すると辻褄があう。

鳴神団地の埴輪出土地は岩橋千塚の大谷山古墳群の西側に位置する。大谷山古墳群を構成する中心的大谷山22号墳は標高130mの丘陵の頂に築かれている。ところが、鳴神の埴輪出土地点は標高12mを測る丘陵裾にあたる台地である。同じような立地条件を岩橋千塚古墳群に求めると、花山古墳群の花山41号墳が該当する。



写真4 花山41号墳埴輪出土状況（大野氏撮影）

昭和41年に花山丘陵の南裾を横断する県道拡張工事に埴輪列が露出した（写真4）。この埴輪列は花山41号墳に伴うものである。古墳は標高12mの丘陵の中腹に築かれていることが明らかとなった。

鳴神団地の埴輪列と花山41号墳の立地条件は丘陵の裾にあたり、扇状地との境に位置する。

扇状地においても埴輪片が出土する遺跡が知られていたが、発掘調査で古墳の跡が発見されるようになった。また、埴輪が樹立された古墳については明

らかではないが、鳴神V遺跡と秋月遺跡からは円筒形埴輪が出土している。詳細についてはまとめの項で述べる。

V. まとめ

鳴神団地の造成時に採集された馬や人物形埴輪は埴輪の生産地であると理解されてきた。それは、(1)造成地において古墳の痕跡を示す遺構が確認されなかったこと、(2)工事中に確認された大量の埴輪が包含されている黒色土の存在→「古墳否定」→古墳で無ければ「生産地」とであると連想的に理解されたことによる。筆者は鳴神の埴輪窯の存在は古くから否定していたが、決め手を欠き26年が過ぎたが、山口善一氏が鳴神団地造成中に発見した円筒埴輪列から古墳の存在を明らかにすることができた。

山口氏の記録を頼りに採集された円筒形埴輪の検討を検討したところ、古墳時代後期であることがわかった。つまり、大谷山古墳群の一面で削平された6世紀の古墳の存在が明らかとなった。

最後に、結論とした埋没古墳について出土した古墳時代後期に製作された円筒形埴輪について若干私見を述べておく。

出土した円筒形埴輪を観察したところタテハケを基調とした川西編年V期に属する。その規格は底部高が突帯間隔より高く、後期古墳の円筒形埴輪の形態から畿内型と言えない事を指摘した。復原した円筒形埴輪は3条突帯4段の資料となり、山口コレクションの円筒形埴輪その形態が主であった。鳴神団地からは山口氏以外に宮田、羯磨両氏が採集されており、その資料には山口コレクションとは異なる形態の埴輪の一群が含まれていた。前述したように井辺八幡山古墳や大日山35号墳でも見られた異なる形態、規格、調整方法の円筒形埴輪が混在していることは周知の事実である。

鳴神団地の古墳においても複数の埴輪群が樹立されていた可能性もあり、引き続き山口コレクションの整理と他の鳴神団地出土埴輪の検討が必要であろう。

最後に鳴神の台地の古墳と低地の埴輪を比較するために鳴神V遺跡と秋月遺跡の円筒形埴輪を紹介しておきたい。

鳴神V遺跡からは円筒形埴輪の出土は報告されている。1993年に(財)和歌山市文化体育振興団の調査で出土した円筒形埴輪は段のある底部(図9の1から4)と外面が粗いナナメハケが認められる。

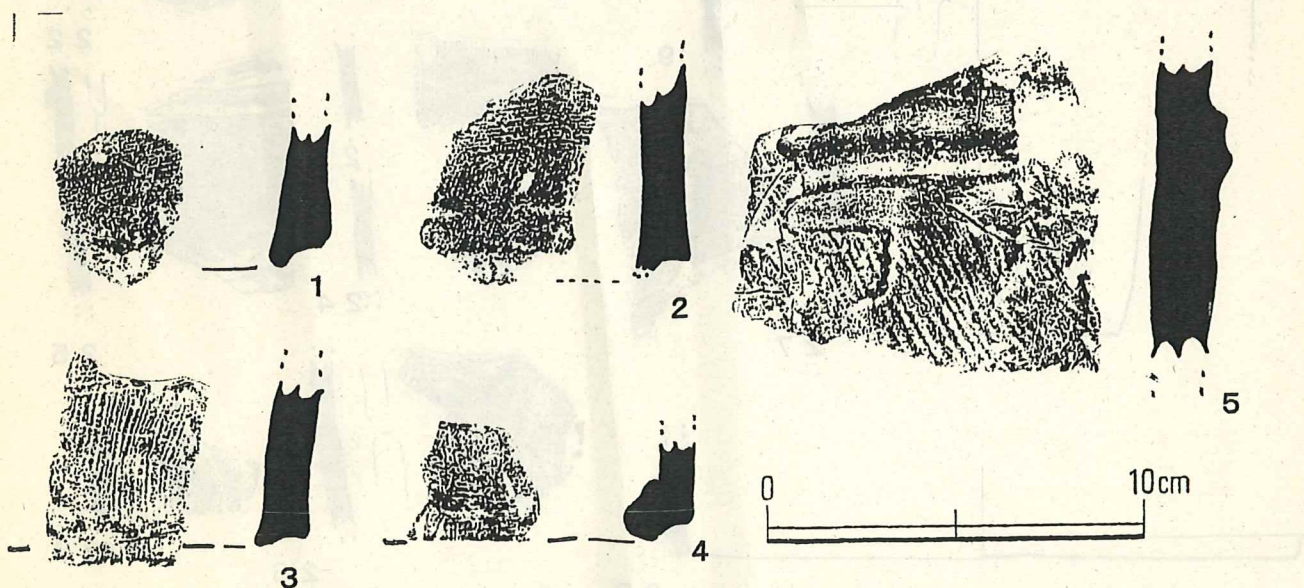
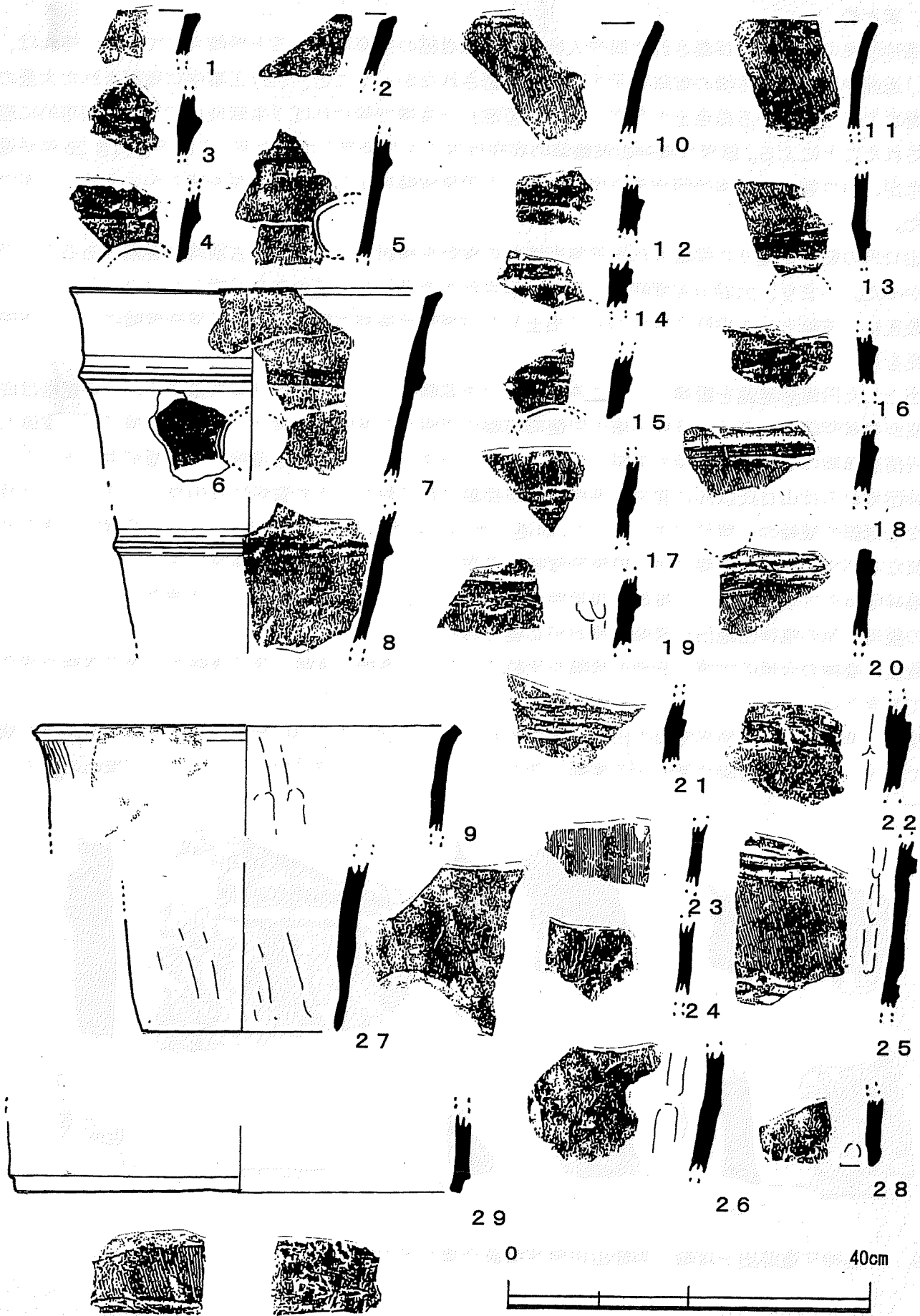


図9 鳴神V遺跡出土埴輪(和歌山市教育委員会蔵、河内実測)

図10 和歌山平野の古墳出土埴輪 (和歌山県教育委員会蔵、河内実測)



技法や調整方法から前者が川西Ⅳ期で後者が川西Ⅴ期になるが、同時期の埴輪として考えても問題はない。

秋月遺跡は少量ではあるが円筒形埴輪の破片が2010年に出土している。図10に図化した円筒形埴輪の破片を提示した。破片29点を形態や調整方法、技法から大きく3つに分類できる。

1から8の破片から復原できる円筒形埴輪は、二分割式の2条突帯3段を考える。b類に該当する。推定器高32cm。底部高が16cm、突帯間隔10cm、口縁部高6cmの規格で、スカシ孔は2段に穿つ。

9から28の破片から復原できる円筒形埴輪は、3条突帯4段か。2条の突帯が遺存する胴部片図10-25の突帯間隔は16cmで、27の残存底部高が17cm、9～11の残存口縁部高は13cmである。推測の域は出ないが口縁部高や底部高は突帯間隔にほぼ等しいと考えている。タテハケの調整法、口縁端部の形態からa類となろう。

29は底部片である。段を有する破片は鳴神Ⅴ遺跡で出土している。

以上、出土した破片から3群の円筒形埴輪は5世紀後半と考えている。

鳴神団地の西方にひろがる日前宮平野には古墳の痕跡が確認されていることはすでに述べた。富加見泰彦氏によって日前宮平野を含めて紀ノ川流域の様相が明らかにされている(文献18)。日前宮平野に築かれた古墳群に埴輪が採用されるのは富加見氏が便宜上呼称している鳴神Ⅱ式の土器の一群を使用していた時期にあたる。鳴神遺跡群は日前宮平野の大規模な開発に従事した新興勢力の居住地である。検出された古墳は集団墳と評価されている。

日前宮平野に築かれた集団墳にも複数の円筒形埴輪が認められ、紀伊の古墳時代後期の埴輪生産が複雑であったことを示している。12類に分けた埴輪群の構成が古墳間の関係や階層が明かになると考えている。

最後に今回は鳴神出土埴輪の内、形象埴輪は割愛した。機会を設けあらためて報告したい。形象埴輪も和歌山県において人物形埴輪が出現する5世紀後葉以降に地域色の強い埴輪が出土することはすでに述べている(文献4)。山口コレクションにはそのほか花山(古墳群)採集品があり、その中に地域色の強い石見型埴輪が出土している。これについても別稿を用意している。

引用文献

- 文献1 井馬好英・藤薙勝則 2005「花山古墳出土の埴輪について」『紀伊考古学研究』第8号
- 文献2 河内一浩 1987「和歌山県における遺跡出土の埴輪について」『和歌山県埋蔵文化財情報』18
社団法人和歌山県文化財研究会
- 文献3 河内一浩 1988「古墳時代後期における紀伊の埴輪生産について」『巽三郎先生古稀記念論集 求真能道』
- 文献4 河内一浩 1992「紀伊出土の埴輪祭祀覚書」『究班 埋蔵文化財研究会15周年記念論文集』
- 文献5 河内一浩 1996「和歌山県下の埴輪について - 埴輪研究の現状と課題を話おえて - 」『紀北考古学談話会会報』No.24

- 文献6 河内一浩 2001「紀伊における埴輪の受容と拡散」『紀伊考古学研究』第4号
- 文献7 河内一浩 2002「和歌山県の円筒形埴輪編年素描 - 畿内の円筒埴輪編年に向けて -」『埴輪論叢』第3号
- 文献8 河内一浩 2003「古墳時代後期における円筒形埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第4号
- 文献9 河内一浩 2004「紀伊型円筒形埴輪 - 後期円筒形埴輪にみられる階層構造 -」『地域と古文化』
- 文献10 河内一浩 2009「“ハニワのせいき” - 背見山古墳の資料をめぐる新意匠埴輪の導入 -」『紀伊考古学研究』第12号
- 文献11 関西大学文学部考古学研究室 1967『岩橋千塚』
- 文献12 関西大学文学部考古学研究室 1967『花山西部地区古墳』
- 文献13 藪田香融 1972『和歌山市における古墳文化』
- 文献14 巽 三郎 1962「和歌山県下の形象埴輪に就いて（其の二）」『熊野路考古』2 南紀考古同好会
- 文献15 辻川哲朗 2010「市尾墓山古墳出土埴輪の再検討」『考古学は何を語れるか』
- 文献16 同志社大学文学部考古学研究室 1972『井辺八幡山古墳』
- 文献17 樋口隆康、西谷真治、小野山節 1959『大谷古墳』
- 文献18 富加見泰彦 2010「古墳時代紀ノ川流域の様相 - 鳴神遺跡群を中心として -」『郵政考古紀要』XLVIII
- 文献19 藤藪勝則 2003「紀伊における円筒形埴輪の編年」『埴輪論叢』第4号
- 文献20 和歌山県教育委員会 1984『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』
- 文献21 和歌山市文化体育振興事業団 1994『鳴神V遺跡発掘調査概要報告書 - 和歌山市都市計画道路松島渡線建設に伴う調査報告 - 』

謝辞

本報告をまとめるにあたって富加見泰彦氏の薦めと仲原、萩野谷両学芸員の支援があったからこそ成しえた。この場を借りてお礼申し上げたい。また、前田敬彦、北野隆亮、藤藪勝則、丹野拓各氏には埴輪見学に際し多大なご配慮をえた。

山口コレクションについては中村貞史氏によって作成されたカードを活用させていただいた。また、2ヶ月に渡り紀伊風土記の丘資料館に押しかけ学芸室を占拠していたにもかかわらず、いつも笑顔で迎えていただきました寺本、藤森両学芸員に感謝します。

